



通俗排悶録

吉田屋 春

九

3143  
9





飛瓊  
義虎傳  
大鳥

合十種

奇説排門録卷之八

義伎之部

錦衣獄賈

六樹園公詞 譯

刑部尚書 刑部 趙公錦 南御史官とるる云々雲南の地わりの事。  
上書 國家の利害を稟しける其旨趣丞相大の嚴分宜が立息よ  
忤 ひさふ因て速をきて京より上り萬里の道を足ぬ械を掛らまて行  
ける 途中ゆき兩次やぐ車より墜る所が偶坎窟み入と車其上と通ま  
共死せざる 依得るもあたらも分宜が内意を受と。警護の者の志已  
ざり わらん日を歴て都に著々ま。錦衣獄みぞ下さる所。時ふ  
太賈 某と云者あり。此も久く此獄に繫れ所が趙公の罪らうとて難ふ

遇はつる成視く位く云々公近日定く拷問せらる玉ふべし。宜く今よ  
し兩足を全うするの計を為し玉ふ六十金を使ひし兩足全き事を得玉  
ふ然らむんを恐るる。兩足共み攻具ふそるの玉のるん公の曰玉  
首領を保るる能くせんとも。何ぞ足ををふ所及せんやと答へり。  
叔明日刑らるる至く其足を夾かん其傍に青衣数枚在る所が。  
陰に趙公をかむひく痛まざるやふ計ひたり。趙公を遂に官人の藉を  
削りて故郷へ歸せり。彼大賈某公の為に自六十金を出し。賄  
く公を救ひし所とせん

五人傳

天啓の年号 明の熹宗帝 年間 朝廷の宦官の魏忠賢と云者 虐威を振ひし。

諸卿大夫忠直よく。刑戮を被る者其數を知く。是故に諸人の怨  
と憤り。閭里に徹し。匹夫匹婦に至るまで。其事を聞毎に髮を豎心を傷  
しめざる者あり。さき共公然とて。憤を發し。蘇列の民が身を  
も顧みず。中貴に抗し。緹騎を歐く義を立し。所が如き外に又無るを  
けり。さき周順昌と云人あり。初吏部文官の式部。の官にあり。時人  
望あり。程よく。謁告く蘇列に歸り。刑居し。老を養ひたる時を  
朝廷の政事。切齒民に不便なる。號令の下る時。當りの人。公を言  
く。民を救ひし所。故蘇列の人。皆周公を徳とて。尊びたる。時。都諫官  
魏大中と云人。又魏中賢に中ら。建をまて。流刑に處し。過る所の列  
絶人も敢て通問する者あり。然るに周公を魏大中。此處を過とて。

一入吳門地名の往く侯ひをとり取く働哭し。魏忠賢を罵り口を止む。遂  
 ぬ為ぬ誓姻縁組をの約を成し。炙酒を奏し日を累く後かうく別を  
 去りて。逆瑞中の怒り。瑞が私する所の御史相魏文煥  
 と云者の託く。周吏部昌頃奸人必黨とと劾奏させ。朝廷の懸る所  
 の周公の藉を削りたる。是の依り入るに已ぬ目目欄欄之所。天啓六年織造中  
 使李寔と云者忠賢の音とらけく。吏部講學し徒を聚と云を  
 坐し。講學し人を皆を去り。都御史付高攀龍御史相周宗建論  
 德繆日期御史相黃尊素李應昇と云者と六人同時あり上りまそ  
 きんの逢入詔使獲列ぬ至りるに周公を敢て駭く。唯嫌慨四の  
 功を主と誠忠をし。泊諾と居り。獲列の人民を貴賤長幼も不分。  
 街之多し。其中の顏佩章馬傑沈揚揚念如周文元と云五人の者最列。  
 名の多し。顏佩章賈人の子ゆ。家に千金を貯し者あり。少き時より  
 父兄に従て賈する事を欲せ。獨二決を成し。埋中の游行り周吏  
 部建之時。郡人皆震駭し。肆を罷け。其上の詔便より。  
 張忠龍文之炳と云二人の者民を虐く。暴恣を為す。民人益々怒りけし  
 とも。前後の身家を顧み。敢て先事を奔る。是の於て顏佩章香  
 を熱く。市中に泣き。又城を周り呼び曰く。吏部が為し屈を請ふ。  
 者わくは才と呼ぶ。市中に或は議す。或は詢せ。或は泣き。或は齒を齧り  
 切り。罵り。或は顏を搏ち。天を顧み。苦を告げ。又はト座の士口凶を占ひ。或  
 ち金を集め。噓を。或は類装し。京師に至り行く。登り。鼓を。者此鼓を

非月録卷之八

打とて搦んとする者ありて奔走して巷衢に塞す。道路に満るる凡四日  
 初若使至と詔を宣る時諸生王節揚廷樞文震亨徐汧表  
 徴と云五人の者竊の計と曰入を怒る事甚し。吾徒早く西臺に渴し  
 衆人の怒を釋べしとて又換列の父老を謂と曰。激し過する勿也。激し  
 吏部の禍を重く却て吏部の為に成らむと諭しけし。父老皆  
 諾し之。叔五人の者相共の西署に詣り。巡撫都御史目付周一鷺と三人は  
 周吏部が罪を謝せん。此も二鷺ハ瑞賢が私人を是目吏部ハ禍を  
 看と。吳縣の令陳文瑞と云者と同く縣村役をも西署に至り。顔佩  
 章と衆人を率とて後を隨ひ行く。馬傑此時先擊柝し市中を鳴  
 せし。從ふ者忽萬人に及けり。折ゆ一兩降陰慘と晝といとを晦を

けし。吏部を送る人皆香を拈事。炬を列べたる如くゆと道を照せり。然も一  
 衣裝冠帽と皆西小淋瀝と履履相躡と泥車成と。脛胫さ之没す。傍  
 前又行る成る。吏部と諸父老に向と勞苦のわらへし。顔佩章  
 等と之をゆと悲小堪ず。天を仰と大の哭き。其聲教里の外やせり  
 時を移と西署に至り。西署に帷幕儀仗を設け。嚴重  
 小飾以成し。詔使張忠龍と諸緹騎と共に庭上の氣張と立。最下小銀鐺  
 鈕鑰等の諸具を陳べけし。衆人目を屬と皆哽因と列居る時。諸  
 生王節等前と出と。周一鷺及び巡按御史目付徐吉と白と。周公一旦  
 瑞が旨小忤を以と。建小就と。故百姓怨と痛ん。控告る小所り。明公後

人本をさうとて天子の重臣とくく益ぞ是を請く其罪を釋しとく民の心成  
 明公あまのりえと天子の重臣とくく益ぞ是を請く其罪を釋しとく民の心成  
 慰しと玉ハざる一瞥日吾も斯くも聖怒の甚を奈何せん諸生又曰然も  
 今日このハ定ぬ東廠魏公の矯活るも且吏部元來辜る徒小口舌を以  
 く禍を賈ふる明公切小上陳一王の辛ゆく看る成ぬ吏部再生の  
 日わく即明公不巧の年あらん若又猜る成得ずとも道を直すと天  
 壤の公小背き玉ハぬん明公小於くも獲所亦ヨるべいと云けま一覽鳥を  
 始め張應龍文之炳も一言も對る事無く只黙然とく居けま諸疑騎  
 目を相視く耳語ける此輩と何者ぞモ公驚何ぞ早く法を以く繩一  
 至ハると云合へ揚念如沈揚西人共小臂を攘げく直小前と訴へ且泣  
 くと日必我請所の如く一王の辛ゆく若清吏を得ぬん吾儕此所を去と

と云く此揚念如と云人故閻門の粥衣入るも沈揚とのと牙僧  
 此西人共小吏部と未相識るも顔佩章共交つる者共  
 義小感とくすわく二人久く滯伏しと在けま塵と起よと云けま  
 肯と起まざる緹騎怒とを吐けま忽衆人の中より大声小忠  
 賢逆賊忠賢逆賊と罵る者あも諸人驚とをを足と則馬傑る緹  
 騎大に驚死吐と日鼠の非車何ぞ斯大言ををせる速小兩が頸と断んと云  
 傍小有る銀鎗を取と擲けま階小中より若然と言せま又呼て日  
 囚共と安小在る速小檻車小載く東廠の魏公小送るべいとぞ却め死  
 ける顔佩章進と問と日上意を朝廷より出せぬ願く東廠より出る  
 と云時小衆人大に譁立吏部の輿人周文元を吏部の速るとゆり



そらうごん  
 横州五人乃  
 任侠  
 自ら誣冤の  
 罪を伏す







けし。卿大夫素服して西臺に謁す。横列の地方を数むる所以を策ら  
 せらる。玄程小毛一鷺を密書を作す。夜中、騎を飛せし東廠に白し。  
 且疏を草して、宥有る由を天子に奏しける。因て檄を飛して蘇列に  
 下し。曰。柝を擗く衆を聚る者、誰そ香を熱く市中を踰位し行  
 へ誰そ。驍雄も勇を賈ひ、魁しく、罪囚に黨して、天使を成るべ  
 誰そ。必悉く誅して赦さざる無れと云。世々衆人始の程を皆周吏  
 部の故を以て。義氣相感発しける。故五人の者一も呼ぶ千百人群り聚  
 る。今捕へ誅せんとすとすとと。稍々と懼れとと逃散る。時五人の者  
 出く自謂く曰。我々を顔佩韋。馬傑沈揚。楊念如。周文元ありと。各自を  
 のり候。小繫。小就。各五人の者。齊く云々。吾侪小人也。吏部不從と

死せば。死せざるが如くと云々。叔周吏部。詔獄ゆく死し。其及て五人  
 の者も亦呉の市に斬せし。五人共談笑自若と。少も懼る色  
 らく。勇く斬らるる。其刑。就一日前。暴風大雨。大湖の水  
 大に溢る。又廣陵の人の話を。小文煥家。居る。白晝堂  
 上。坐し。忽々五人の者。嚴く装束し。劍を仗。旌を建。周吏部  
 小後。来ると見え。忽々見えず。庭の井石。刺自然。飛記。空中に  
 舞。其の良久。隨。其声。雷霆の轟。如く。明年。烈皇  
 帝即位。至。魏忠賢。積惡。發覺。誅せらる。吏部の子。周茂蘭。  
 血を刺し。書を上。父の冤状を奏し。其。詔。吏部が冤を恤。小  
 召す。小文煥を誅し。其。於。蘇列の士大夫。相殘し。即ち前

夷を所の瑞賢が祠の廢址へ五人の身首を哀めり合墓を石を堅く表  
 とし四時の祭を成し祭今亦至るまで換列五人の墓と稱し香華の  
 絶る夏る証寛せり一人指を祈る必其驗應ありと云ん

髯參軍傳

明の思宗皇帝の時公子某と云入わむ時の相國大臣某と云人の門  
 奔走し京師より三千兩の金を持て獨故郷の帰る途途中入の  
 僧の遇ひたる此僧容貌猙獰し行李鐵の扁拐黒く光り甚重なる  
 肩と公子をのり移る凡二泊る公子を初より意ぬみず是夜も旅  
 舎の抵り左の廂に止る彼僧も繼ぎ移り右の廂に就て炕上の側臥  
 ける旅舎主人密に公子を呼ぶ耳語ける客必京師より来たると云ん

裏中必金有るらんこまに彼僧俱來と止宿せり若金  
 無んを彼笑ぞ客と俱に至らんやと知せしが公子始と心動と翁皇と  
 措を失ひ居る時忽一人の大漢子來り是を身身の長八尺餘  
 腰の大さ十圍一圍と云十圍ハ一圍と合セテ鬚髯盡く赤うしく激張事鬚の  
 如し座上小即と弓を擲刀を投り大音ゆく酒食を持來と叫ぶる甚  
 急に公子益驚恐怖と股栗と既小仆と云るを虬髯微頷と曰  
 君が神色をえり必急の事あるらん蓋ぞ早くの玉へると問けれど公  
 子と屏息し瘖の如く成り居る故主人乃公子を代と金を拵り僧  
 小遇ふる代悉く述べ鬚曰其僧今安に在る主人右廂を指し炕  
 上の臥りと告げし鬚乃公子を願く動き玉へると云と直刀を

提げ淵を排き入りて罵り曰鈍賊何ぞ道上の糞を拾ひて却て行  
 劫を為すやと云さるぬ彼鐵の扁拐を弄りて屈て環を成して坑  
 止し擲て曰若是を元の如く直さる若し心聴ぬ客の金を取去は若直を  
 する能はむんバ亟項を引て刃を就れと云けは僧僵臥て動さず良久して  
 始て匍匐て地を下り命を助け玉と清らる扁拐の環を成し我願視て  
 又大膽を冷し泣を下りて益哀清けは髯咲て曰我料る若此扁  
 拐を直まその能を吾若が為ぬを直せん是看ふとくすうくと直  
 僧の擲て若速ぬ去て乃公の刃を巧まると訶りけは僧を鼠の迹  
 る如く頭を抱へて遁行する公子と主人と門外よりを乞を觀て舌を咋り  
 の縁が趨て前より羅拜し姓名を問けは髯尖て答へど皆安公して寤ぬ

次の日早天ぬ起出と公子の為ぬ道を護りて行んと云けは公子大ぬ喜と  
 拜謝し同行を日を徑て楊列名園の界ぬ到りけは髯公子向て曰  
 君但獨行玉へ是より先を患わたり吾見ても去んと云くは公子頭を叩  
 て拜謝し曰某客の大恩を受て報い奉るる無し願くは三百金を進  
 せと壽を為ん且是より某が家へ抵るや計るは僅四日の行程なり願  
 くと俱ぬ江を渡りて南に某が家ぬ至りて多くと云くは髯咲て曰吾家を  
 紀て軍ぬ従ひ今隻身ぬ行く幕府の標官ぬ屬せむ設金を食ふを  
 豈止三百兩のさるらんや君が囊中已ぬ吾が有らん且吾日限已ぬ迫り  
 君ぬ従て江を渡るる能を若此後公事ぬ縁て江を渡る更わぬ必訪  
 奉らん其時幸て我がるぬ麵十五斤生蔬二口酒一石を具し玉へと云くは

公子已むるの成る。涙を流しと別る。斯く公子家又歸り。數月を過  
ける。虚ぬ忽門外より大音揚る。公子恙無しやと呼る声。けと  
公子驚く。髪を引る。鬢果して至る。大悦び。出迎へ。寒暄訪畢  
て舊事の大恩を謝し。鬢耳ゆも聞入る。唯大悦び。吾飢る。夏  
甚し。急め約せる品を具へ。食と云け。六公子亟。麵。生。酒を約の如く進め  
ける。鬢立所。酒を飲み盡し。腰の佩る刀を抜く。生氣を刺し殺し。自  
み揉み餅とる。炙る。啖ひ。忽其半を啖ひ盡し。公子曰。参軍の  
力寔の山を抜。度る。幾百鈞を拳玉ふ。と問け。鬢答く。吾も亦自  
幾百鈞を拳ると云。夏を料む。今髪を試んと。乃庭の楹の上。站く。數十  
人を集め。身を撞し。む。立る。少も動る。鬢曰。是吾が力。成

試す。不足ら。又二指を鑿く。中を一寸程削き。繩を二匝繞ら。と  
健兒數人を差。力を極。頭へ曳。相。屈強なる。鐵の如く。一分色  
動。能。髪を見。公子進。曰。今天下盜賊。起。朝廷。亟々  
兵を用。玉。吾料。参軍の威武を以。賊を中原。殺。王。朽  
木を柱。如。今首相。某。吾師。吾一紙の書を。馳。参  
軍の夏を稱。大將軍の印を。掛。旦夕の間。馬人の麾下  
と。隸と成。居。玉。と云。鬢天を仰。呵々。笑。徐。公子。向  
と。曰。君。固。某相。國。大臣。の門下。の士。吾行。と云。願。せ。七  
出行。と云。

崔猛

建昌地名崔猛字勿猛と云人あり。建昌ありて世家の者あり。性剛  
 毅より初き時師の塾中在り。同門の諸童蒙稍一犯あるを不輒  
 拳を奮と毆撃する。師屢戒をよそ。遂に復むる有り。因て名字を師  
 の斯と付たり。是猛き性と云へども心不抑へり。必外におかま莫勿と云  
 戒の意えたり。已に十五六歳に成けり。強力武術人の絶倫也。又能長年  
 と持く。夏屋の躍り登るるの妙を得り。平日喜々人の不平を雪ぎ  
 る故郷人盡く服し敬以畏たり。是故より上の難儀を歎き拵へ  
 頼り事ある者益夜絶て家に入り居り。崔祥ふをばえ。強と抑へ弱  
 と扶け。人の怨も悪むをも避む。或大に怒る。毎に人皆懼る。敢て勸  
 る者有り。惟母は事と孝行する故母至るに忽怒を解む。母譴責するの

備至るも崔母は唯々と云て命は背くるの多し。其頃比鄰小悍  
 婦あり日々其姑を虐しとほとく。餓死せんとす。其子竊て食  
 と與へて啖しけり。婦知覺て夫を詈罵と止す。其声四院小竹  
 け。崔其声をばえ。堪へむ。垣を踰り入り悍婦を捕へり。鼻耳唇舌  
 盡く割けり。婦立所又斃り。母乞をばりて大に駭き。鄰子を呼ぶ。極  
 意小周卹み。少の金を遺て葬を為し。自家使所の少婢を遺て。婚  
 せ。免事乃寢る。母之憤泣し。食をも啖べり。崔惧る。母の前  
 小跪死後悔せる由を告ぐ。杖を受んと清け。母泣く。願ふ。崔が妻  
 周氏も亦與小並と跪き清る。母乃崔を杖と。又針ゆ。崔が臂に十の  
 字を刺す。朱を塗て滅る。勿らしむ。崔謹と責を受る。故母稍小

心解く乃食を啖ひたり又母嘗て僧道を厭するを喜まむ  
 あま我厭食飽せしむるのわづ。適一道士来る時崔門際ゆく行遇ふ  
 道士崔を目と曰郎君凶横の相あり。恐らくも令終を保ち難うらん  
 積善の家中有徳うらるると云々崔母の戒を受へ上るまは  
 彼く敬まる公を起し。答く曰某も亦自是を念ふ然も共如何せん但一  
 不不平の事をいふ時自禁へるが性あり。今も後力め改ん  
 と欲む免る可や否や道士笑く曰姑く免るや否やを問ふ勿き先  
 く改むるや否やと自問王へか。君但痛く自抑へよ若萬一の更何ん  
 吾君が為小死を解る術を告んと云崔生平厭禳を信せざる故笑て  
 答へず。道士又曰我固より君が信せざるの成知る。然も今我が云わ

のり。巫願の志と云はれ。崔願くをばをばんと清く道  
 士乃曰今門外ある二人の後生君宜く厚く結玉の命。死罪を犯す時  
 亦至く。此人能君を活えと。即崔を門外呼ぶ。其人を指示る。其  
 人趙氏の兒ゆ名を僧哥と云ふ。趙氏は南昌地の人。く侵饑を避く。  
 建昌地。又僑寓し居る處を崔は深く相結み。遂に趙氏を替て吾  
 家の館し。厚く供給す。此時僧哥年十二ありけり。堂の登りて崔  
 が母を拜し。崔と昆弟の約を為す。年と踰く時つ時成けり。趙氏  
 が家内を携へ。去りて其後遂に自向を絶し。崔が母を崔  
 が隣婦を死せしむ。崔を戒むる古又愈益切り。若人來り赴訴者  
 わま。輒擯斥し。崔亦慎守く居る。或日崔母の

第卒する由を告末でけは。母は後く共小市小行を途中小く忽熱  
 鬧りけは。何夏るんとをを足ふ数人ゆく一人の男子を執示す。  
 呵罵し推撲る引行く。觀る者多く。道路塞す。進むを得  
 ぬ。雀何夏ぞと問けは。雀を誠認する者競ひ来り。相擁と告る。此  
 郷小巨紳子某甲と云者あり。一郷中の豪横しく人を虐せしむ。去る比  
 李申と云者の妻の色を窺く奪へんと欲せども。由道る免故小家人  
 小命しく李申を誘く共小博賭をさせ。賞を貸く其息を連くし。  
 其妻を券小署し。輸盡せ復借つ。子母積りて三十貫餘小成る故  
 李申償事能へむ。是れ於て強小ヨ人遣り。申が妻を慕ひ取らむ。李  
 申歎死悲く。某甲門小行哭泣と詰ひくる。某甲大に怒り。李申を

樹上の藪だたえつはさうしく。逼り無悔状を泣くむと詰りては。雀  
 小く忽熱漏れ馬小鞭く前んと母轎子の中よりをを足く。簾を  
 寒く大に呼く。曰。咄又故態を發せると云く。雀乃止り。既小市  
 しく帰る。言をも詰む。食をも啖む。只元坐しく直視居る。妻を詰  
 む。詰りも答へず。夜榻上の臥せども。終夜輾轉しく煩悶し。寝どしとあ  
 りぬ。次の夜も復同く寝ず。戸を啓くと輒又還りて臥す。此の如くも  
 夏一夜の中三四びる。妻も敢て詰む。惟心中小憎く聴ひる。既して  
 雀亦出く煙久しく反り。扉を掩く熟寝る。叔某甲が家あり。此夜  
 誰共知とす。某甲を床上小殺し。腹を剖く。腸を流し。散り。甲が妻  
 をも殺し。尸を裸め。林下小棄置たり。翌朝小至り。家人始り見く



大い驚死速に官に訴へるが官乃鞠訊し。李申が所為を尋ねんと疑ひ  
 速に李申を捕治し強く責むる。裸骨皆見ゆ程なるとも。李申卒  
 二言の詞を。積年餘りし李申堪るる能はず。遂に証の腹しと辟を  
 論らざる。折る。崔が母死し。既死するの畢まれば崔妻の告く曰  
 先の夜某甲を殺す者寔に我なり。老母在を以ての故に徒二日を送りて  
 敢て口外せず。今大事已了ぬ。奈何ぞ我一身の罪を以て他人に殃せんや。  
 我自有司に赴く死せんものとて。夕ゆ。妻驚く衣を挽く止めんと  
 すと。裾を絶て行遂に度み自首し。官に乞ふに愕然とせども先械  
 獄に送り。即李申を釋ゆんとす。李申可ず。堅く争て料を乞  
 む受んとす。官も決する能はず。乃兩人共む杖へ置る。李申が戚族

皆李申を誦讓し。曰。何ぞ証を承とるやと問けむ。李申答く曰  
 崔公子の為る所也。寔に吾が為んと欲し。え為ざる。然るに吾坐る  
 ぐる其死を視るに忍びんやと云く。かく詞を異す。崔と對決するも  
 固く争ふ。然も共衙門ゆも日を経て。皆其故を知りけむ。李申を強  
 と獄におく。崔を罪に抵し。決す。就まんとす。折る。郎刑官  
 趙部郎と云人。建昌地名。案臨し。王以囚共を問る。崔猛が名有けむ。  
 即人を屏げく崔を呼入る。崔入り仰ぐ。堂上を視る。僧可く大に驚死  
 悲喜し。寔を訴へる。僧哥排徊良久。仍獄に下し。獄卒  
 共み囁く。善く視る。免尋ぐ。崔自首すと云を以て死罪を免し。  
 雲南軍地名。軍の。成卒を充て遣はる。李申自請て服役と成て共

不行之處。未一年。有之。赦免之例をひく。故郷へ歸る。僧哥が力あり。既へ歸り。後も李申の終へ後と。李申受む。是故へ崔  
 代と生業を經理する。因と貨を引へれども。李申受む。是故へ崔  
 心用ひく厚く遇。妻を與へ田を授け。崔も亦是く。母の教戒をひ  
 行を改め。每へ臂上の刺痕を撫。法然と涙を流。母の教戒をひ  
 出。是故へ郷鄰の圖ふる。李申輒行くと。崔が命と矯と排解  
 し。崔のやせざる。爰へ王監生。監生の。と云者わ。家豪富め  
 暴悪ありけ。四方の無頼者多く其門へ出入。邑中の富る者多く  
 是へ掠め取ら。或へ王が公へ送る者。輒盜を遣く途中て  
 殺す。王が子も亦淫暴あり。家一人の寡婦あり。身を憑る。

故王家の寓居。王父子共へを恣せり。妻の仇氏を之知  
 屢王を沮めけ。王厭ひ。遂へ妻を殺す。因へ仇氏兄弟官へ  
 鳴へ。貨を請へ。王諸官へ。喞。法曲と。遂へ仇氏兄弟  
 と。誣告と云。罪の坐。仇氏兄弟冤憤伸る。崔小詰へ求訴  
 んと。李申絶へ。崔へ遇せ。數日を過。客至り  
 け。適僕共一人も在合。崔李申を。茶を瀉。李申  
 李申黙。外へ。日我元來崔猛と主後の契有。非  
 實と。朋友之尚萬里の外。後へ徒へ。艱苦を共へ。吾崔  
 對。行届ぬ事。然るへ少の廩給。役使を。事  
 斷養と同じせんと欲。是甘。所へ。遂へ何處共る。出

去す。或人此更を崔小告げし。崔も其節を改し。成訴す。未甚信せし。所所小。李申忽公堂小訟す。曰。崔三年の間の備價を給さざると云ふ。故崔大に異之。親官府小知く對状しける。李申愈く崔と相争ふ。然共元來不直のるる。官不直を責む。李申を逐去す。其後数日を過し。李申夜王家小忍び入り。王父子嬪婦三人共小忽に殺し。自姓名を紙に書し。壁小粘着。踪跡も無く亡命し。王家追ひ捕へんとす。小知さず。崔が主使するんと疑ひ。官小訴へ。崔官ゆへ。崔を疑ひ。此時崔始く悟す。李申が前日の訟も。人を殺す罪の己を連累させし。の爲ある更を知り。官ゆへ。李申を追捕する。甚緊急。斯る小聞賊より。周園より出

運賊。順列名を犯し。故其る。遂小寝る。程あ。明の代品草し。清の代と成けし。李申家を携へて歸り。復崔と善き更始の如く。時小土寇の黨を結び。聚り。王監生。後子小王得仁と云者あり。叔監生が招き置し。無頼子共を集め。山小據り。巢を構へ。村曠を焚掠り。盜と爲し。一夜。巢を傾く。崔家小至り。復離を以て名とす。劫掠す。適崔と他小出く。家小在。李申扉を破り。始く覺り。大に驚き。牆を越え。暗中小隱伏し。窺ひ。賊共。崔を捜せ。得ざる。故崔が妻を推し。財物を括り。奪ひ取ると。李申歸り。家人皆逃散す。止一僕のみ居けし。無念小か。乃繩を數十段断り。短た者を以て。僕小付し。長き者を申自懷し。入。僕小囁く。賊の巢を越し。

山の登り半頃まがひの至りいたく。繩なはの火ひを熱あつく。荊棘しんげきの散ちぢり。後あとを顧かへりて  
 早く帰かへりて来きると云いへば。僕わが諾だくしと出行いる所ところ。李申りしん賊ぞくを窺うかがひ。小せう皆腰みなこしの  
 紅べにき帯おびを束たづね。帽ぼうゆる紅べに絹きぬを敷ふき。遂つひに其その装まゐひ又また老ふるる。北馬きたま  
 の項かた日駒ひこまを生うる。乃すなはち賊ぞく共ども門外かどがらみの棄す置はなす。李申りしん乃すなはち駒こまを縛くわり  
 をた。北馬きたまの跨またりて。技わざを。技わざの竹たけや。製つくり。左右さゆうへ紐ひもを付つけ。後あとゆき。締しむ。出いで。  
 直ただに賊ぞく沈しづみ。到いたり。乃すなはち賊ぞく一ひと大おほ邸ていの據より。李申りしん乃すなはち馬うまを村外むらそと  
 小せう軌ぎ系けいぎ。垣かきを踰こり。忍しのび入いり。乃すなはち賊ぞく共ども衆しゆ聚あつみ。紛まん。拵しゆ未ま釋しやくす  
 一ひとく在ある。李申りしん竊ひそか諸しよ賊ぞく共ども向むかふ。崔さいが妻つまの所在あつちを知しり。如何いかにと  
 窺うかがひ居ゐる。處ところに俄たちに冷ひやを傳つへ。各自各自を休やすみ。息いきせ。時ときに轟とん然ぜんと。噉く應おこす  
 一ひとく。忍しのび入いる。處ところに。来きり。東山とうざんの火ひ有あり。と報はけ。賊ぞく共ども皆みな是こゝを望のぞみ。初はめ

一二いちに點てん見みえける。忽たちち成なる。星宿せいしゆくの天てん列れつる如ごとく。乃すなはち李申りしん  
 大息おほいきつと急いそに呼よぶ。陳ちん營えいの夏なつ丁ていそ。わま。と云いひ。王わう得とく仁に大おほ驚おどろき。  
 處ところに甲かひを取とり。肩かたに投なげ。衆しゆを率しゆり。出行いる所ところ。李申りしん其その間まに衆しゆを  
 隊たいの中ちゆうを漏はれ。後あとに下くだり。引ひ返かへり。内うちに入いり。乃すなはち西人さいじんの賊ぞく共ども帳ちやうを守まもり  
 居ゐる。頃ころに給たまり。王わう將軍じやう軍佩はい刀たうを遺いす。王わうへ。吾われが持もつ。来きると。命いのちを王わうとのひ  
 け。西人さいじん賊ぞく競きやうぎ。内うちに入いり。佩はい刀たうを見みん。と。李申りしん後あとに。破やぶれ。着きけ。乃すなはち  
 入いる。後あとに。踏ふむ。此こゝ音ねに驚おどろき。一ひと人にん回かへり。顧かへる。處ところに。又また。斬きり。着きけ。乃すなはち  
 遂つひに二人ふたり共ども声こゑを。た。乃すなはち驚おどろき。李申りしん内うちに入いり。崔さいが妻つまを。負おひ。  
 牆かきを越こえ。道みちに。出いで。馬うまを。乗のせ。嚮むかひ。授たまへ。曰いふ。度たる。小せう娘にやう子し。途みちに。知しり。王わう  
 乃すなはち馬うまを。縦たせ。行いく。王わう此こゝ馬うま駒こまを。窺うかがひ。必かならず。駛かり。奔はる。乃すなはち周氏しゆうしを。獨ひとりに。

其身も後小従と一隘口を出る所。又燭火を灼く。編く木の枝荆棘は  
 掛けく歸る。次日早天の崔還と是を伴ふ。大辱を忍ぶとと。跳躍  
 單騎往て撃つ平げんと驅出せ成。李申のうろく。諫と寢止めを係扱  
 李申村人を集め謀らんとす。衆人咸懼怯と一人も敢て應ずる者  
 あり。李申再四辯論し之れバ。けり同公す。者二十餘人を得たり。然れ共  
 又兵具乏る。若くは。折節得仁が族姓家小於之。奸細二人を獲る。末  
 是の崔を殺さんとし。けりも李申可也。二十人の者命と。洛ひて  
 白杖を持し。一編小具列ね。彼奸細の者を引出。二人共其両耳を  
 割く。縦ち遣る。を與怒り。曰此等のあり。方ぬ賊の知ん事を  
 恨る。然る後反と放ち脱む。賊若其巢を傾く。來バ盧村必保つ。夏能下

と云け。李申曰吾も正ぬ其來らん事を欲まると。彼奸細を匿  
 置る者執へ。之を誅し。人を研々へ。か弓矢小筒の類を借あぬ。  
 且は往て大筒二つ借出。日暮に至ると李申壯士を率と。艱險の隘口の  
 處に至り。砲を置て其衝ぬ當と。二人命と。火を取て隱伏しぬ。  
 賊來る。疾く速に突く。又谷の入口の東の方へ行と。樹を伐と。崖の  
 上を置き。自身も崔と共に各十餘人を率と。岸を分と。埋伏し。賊の  
 身も今や遲さと待居り。賊將王得仁も。斯備虞あらんと。六曹も  
 知る。一便過る頃ぬ大衆を率と。出來る。李申遙に馬の嘶をせと。  
 暗み現る。賊共果し。巢を傾と。出來り。李申賊共の盡く。谷ぬ入  
 了を俟と。乃崖上の樹を推隨し。歸途断つ。俄砲獲し。声山谷に

崔猛義に依て  
 李申少為年  
 甲夫婦を踏  
 殺す



震動一ける。賊は夜に遠く悚き。驟に引退ると。相互に蹂躪して。  
 東口に至ると。途塞く。或る所。一處に集り。少の隙地  
 も無し。兩岸より射發つ矢銃も。兩散の如く。頭を断り。手足を折者数  
 を知る。枕を並べ。溝中。以て藉滿る。僅に遺る二十餘人の者。頃首膝行  
 して。命を乞はば。乃人を遣して。繫し。送る家。撃置き。各を勝  
 小果し。直に賊巢。抵り。これを巢を守る者。風をゆるく。奔竄。一人  
 も在合。其輜重を搜し。奪ひ還り。其西の方。追ひ至ら。其  
 謀を問はば。李申答く。曰。火を東に設る。其西の方。追ひ至ら。其  
 を恐ると。其繩を短くせし。其速に燃盡ん。其欲を遂げ。其速に盡ん  
 其を欲する。其人無き。其復ひ知る。を恐ると。既して。谷口

設く。谷口甚隘。一天爰を守ら。萬人も通る事能は。賊の  
 追来る共。火を必。懼んと。謀して。是皆一時險を犯す。下策あり  
 止む。其復ひ知る。故に云ふ。賊を鞠る。果して。追く。谷口。火  
 を見く。大に驚き。賊は退る。由を云ふ。是に於て。二十餘人の賊共を盡  
 く。削り。則ち。遂に放ち。是れ。由に。威声大に。遠近に。震ひ。乱を避る  
 者。従ひ。市に。行か。如く。土團。三百餘人。を。各處の。強寇。散て  
 來り。犯す。者あり。一方。是れ。頼り。安堵し。爲と。

附舟人

嶽列。名。布。商。を。爲。者。あり。密に。十兩の。金を。携へ。舟。人の。知。ん。事。を  
 恐る。布の。捆。中。に。分ち。貯へ。舟。に。載。せ。帰。り。路。に。附。舟。を。求。む。

人の中其人を召し出さず。状貌雄偉あり。既に舟の登り。物語と云ふ甚致治  
 あり。二宿を裁し。其人別と云ふ。いとよき時。岸上の囊を擔ひ。煙商  
 者有を招き呼ぶ。是れ其友人あり。其人乃高と友と云ふ。數へて云  
 人共。村中の酒店より行。酒を飲。畢。友人を囊を擔ひ。先行。其  
 人と布商と共。村店を出。密に語。云。吾。甚急。有。君が  
 布。中の物を需む。暫借。たま。某月某日。尊宅。造。還。奉らん。  
 必相領事。幸。と。声。揚。王。の。勿。若。否。王。の。必。君。の。為。不。利。有。ん。  
 と云。詔。長。緝。一。と。去。る。其。疾。事。飛。如。頃。刻。行。方。知。成。成。多。  
 布商。大。駭。急。舟。歸。と。乃。布。皆。故。の。如。相。束。初。也。  
 置。少。も。移。動。甚。疑。ひ。船。中。啓。視。も。不。便。也。

且。其。中。小。家。小。抵。也。始。と。相。を。解。と。視。る。金。既。無。忙。然。と。一。  
 大。異。之。是。た。為。ん。方。也。徒。其。期。日。を。待。居。る。其。日。既。斜。成。是。た。  
 門。前。寂。然。と。一。入。も。来。る。者。無。因。と。意。其。約。を。所。全。く。我。  
 を。誑。る。り。と。の。ひ。ふ。然。も。期。日。より。三。日。を。る。と。彼。人。囊。を。擔。ひ。  
 支。と。共。み。り。積。と。償。か。者。来。れ。と。云。囊。中。より。金。を出。前。數。の。  
 如。く。返。し。其。月。數。を。按。へ。五。分。の。息。と。加。又。別。一。封。の。銀。を。か。と。日。吾。友。  
 些。兒。の。故。有。と。爆。く。来。り。故。約。日。を。爽。あ。る。の。三。日。あり。因。と。更。一。月。の。  
 利。を。加。返。納。と。云。商。途。巡。と。向。と。日。君。を。固。小。俠。士。あり。前。日。何。の。  
 急。用。を。せ。吾。金。を。假。し。玉。高。其。人。答。と。日。吾。至。親。の。人。事。を。犯。と。官。  
 小。在。一。故。急。財。を。行。と。命。を。買。ん。と。欲。と。共。倉。卒。の。事。ゆ。辨。と。商。



事能のホ。故ぬ已む夏を為る。暫く君の金を假りて高又向く曰。布  
相少も動らぬ。金と何と取り取出し玉。其人笑く曰。吾自取去あわ。  
必向玉ふ夏勿とと。乃酒を索と共飲之。且云。吾輩何處の物めても  
取らんと夏を。取らぬと云事あり。但人の累を貽と恐るが故ぬ為さる  
こく。頗る數杯を傾と。暮夜に成けし。去るべしと。二人中庭に歩み出  
く。二躍のふ屋上の躍り登りて。屋の瓦に音を。二人共去向知らず成ぬ  
けり。

義盜

湯若士人進士前はとるり。北京都の上りる途途中ゆく。驛有く雄く  
偉る人ぬ遇と同行り。此人行も止るを必湯と偕みしけり。日を歴さ

とこも狎らるひり。彼人湯ぬ向と。君が囊中の金幾何あると問  
けり。湯隠さぬと。宜きを以と答ふ。彼人又曰。君が行李吾僕ぬ負  
り。君が肩を息めんと欲と。許し玉へんや。湯曰。可矣と云と。其盜あ  
るの疑ふ心少しを無し。憩所毎に彼人必先驅し。湯が為ぬ飲食を具  
と待居る。此の如くもるる九数日。湯を伴と。視と笑と曰。君を  
寔ぬ長者に我國より緑林の高家あり。君が囊ぬ我々けり。君がぬぬ不  
利を為んと。然る我ぬひかひり。君を推しと人の腹中ぬ置と。予と  
少も疑ひ玉へ。予竊ぬ君が囊中を驗ぬ果しと。君が言玉ふ所の數  
ぬ少も違を。予盜と。共何ぞ金の枚を以と。君の如死長者と賊ふ  
忍んや。前途吾属猶も。君を送り奉んと。數日護送と。曰。君行ぬ

燕京燕の都程ちか近ちか々々道みち路みち難がた有あるま度ど無なし。吾われをこ此こよりり別わかるべし。遂ついにな小こ辭ことば一ひと去さりて湯ゆ京きやうぬま至いたり。日ひ比ひをあるく出い行でるゆ。羅ら者しや盜たうをあ措ありて市いちぬありて遇あひまり。是こゝにありて前まへにありて遇あひまり。所ところのへ湯ゆ愕おどろ然しかとしては前まへにありて其その由よしをあんとしけるべし。監かん巡じゆんのめ目めをあせりては語ことばをあるく勿なし。是こゝにありて相あ累ありてせらる事をあ恐おそむ故にこ時ときの法例ほうれいぬ騎馬きまの盜賊たうさくの鎗矢やう持もちつる者ものもありて捕とらる事こともありて首くびをあ斬きる事もありて讞えん訊しんさる度ど無なし。騎き馬まもありて鎗やう矢やう持もちつる者ものもありて首くびをあ斬きる事もありて斯かくせらる事もありて弛ゆるまる事こともありて湯ゆいふもありて為なる事もありて只ただ愴あはれる事こともありて。

雲娘

密雲みつうん地ちの汪叅さん將しやうと廣陵りやうの名地ち人にんの僕王わう忠ちゆうと云者ものあり。常じやうぬ酒肆しの

李家りやうけぬ往來らうらいしける事もありて相あ善ぜん者ものあり。時ときぬ李家りやうけぬ一人ひとの娘あり。名なを雲娘うんぢやうと云。父ちち母はは寵ちゆう愛あいして今こん年ねん十じゆう八はち歳さいぬ成る事もありて王わう忠ちゆうぬ歸馬きまる事もありて程ほど歴れきと汪仕し満まんけし官くわんをあ解とけし維い揚やう地ちぬ歸らんと云。王わう忠ちゆうをあ呼よびて輿うの具をあ備びんる事こともありて王わう忠ちゆうも亦雲うん娘ぢやうをあ載のせる所ところの者もありて雲うん娘ぢやうが曰主しゆの行李りやう甚しん壯じやうなり。河か北ほく道だうの道をあ行やう王わう忠ちゆうぬ征途てい必かならず靖せいありし我われも亦軍ぐん人にんの装ぬ効く事もありて弓ゆみ矢やをあ執とりて後あとにあ行やう不ふ虞よをあ戒けいんと許ゆるす事もありて王わう忠ちゆうと云云々云々云々汪わう他たのくめがらしく事もありて雲うん娘ぢやうをあ召めいす事もありて五ご石せきの弓をあ授あづかる事もありて乃すなはちは弓ゆみをあ折をりし事こともありて枯こ梗けいをあ折をりし事こともありて如ごとくは九く数すう弓ゆみをあ目め易やすけし事こともありて雲うん娘ぢやうが意をあ稱なへし事こともありて願ねがふ事もありて王わう忠ちゆうぬ曰我われ家けの弓をあ執とりし事こともありて乃すなはちは遂ついにな腹はらをあ腰こしぬ着とし夫つまをあ伸のべし事こともありて駿しゆん馬まをあ乘のりし事こともありて從したがひ行く事もありて時ときもありて。

己卯の歳の夏明の崇禎十二年の夏明の亡びんとす時節群盜路を塞ぐ  
 行客を劫殺しけり。汪森將行々々ある荒原に至り。雲娘を見て馬を緩く真先前  
 余騎の賊共塵を擁く突く至る。雲娘を見て馬を緩く真先前  
 賊矢を發つて雲が袖を拂ふ。雲袖を揮ひて矢乃地に落る。又一  
 矢到る云を以て承る。即ち發ちけり。賊を見て驛に馬を反  
 奔らんとす。所を項を射着らんと忽地上に仆る。雲又腹  
 の中の矢を取り疾く發しけり。又一騎斃る。是を見て餘賊後を追  
 追散る。是に因り森將事故を家に抵着る。行李全くく  
 寸著の失無きを雲娘が功なり。雲娘容顔殊く艶しる。森將が子  
 心動く。押おさんと欲しけり。雲娘曰く妾を下走の陋質ある

不意に公子の憐れを蒙るる。寔に望外に也なり。然るに共王忠斯に在る。  
 公子の意に任さるふ心必ぶと。今王忠を外へ遣す。其後礼を以て妾を迎へ  
 王の若きを我乃ち従ふと云ふ。故に公子望外に喜ぶ。堪へむ乃王  
 忠の厚く給しけり。雲娘即ち指示して去らる。公子吉席を治して雲  
 娘が粧を催させる所。雲娘忽ち戎服を易へ佩く所の刀を制して悠々と立  
 出る。堂上に立ち公子と責め曰く爾が家を忝も累世より高牙を建る。  
 地に然る奇計を出して。困思に報いんる。我を殺す。偶少に荏苒と偶に  
 巴滿焉と膽を悚ま。妾一婦人を以て長途を衛つ安吉と迄して吾  
 公子に報る所の者至り。然る何ぞ忠に不義を行ふ。我が貞素と玷を  
 んとと云ふ。處に刀を以て公子に示しむけらる。跡を尋ねりて大に小

雪娘汪泰將の  
行李を守りて  
擅め小賊等と  
大に戦ふ



呼ちりて曰。我を更ふ者あらず。我即其頭を断んる。河北の益の如く  
 んと云ひて六公子を始諸人皆驚き悚とて。魄を喪ひぬ。雲娘と悠々と  
 門外にまきまき。門外に已に碧衫奴来り。馬を控へて待居る。遂に其  
 馬の騎と馳去りて。永く復返る所りなむ。

飛瓊

飛瓊と廣陵名地の何氏の女あり。母小随と蜀中の中。ゆく成長し蜀王  
 の府へ入る事へ之。梨園を習ひ顔色人絶え。去る声も又衆を引け。六  
 蜀王甚に嬖し。晝夜側を離ざりて。困草やく。明朝七ひ。清の初大帥は  
 得ては。仍樂籍よけ居り。一都閩ある人適相押と。千金を以て飛  
 瓊を買去るを大帥悪く。其短を持て復千金を索む。諸當事も

又責求け。是不便大金を費せ。次以て。都閩遂に庫の上り。帑を  
 欲多。其罪を以て獄に下り。けと。償ふ籌も無り。飛瓊都閩に  
 向て曰。君妾が故を以て。此難小至。今若小節を惜と。此を守り居る  
 べ。終に主を獄底に陥んと。遂に辭し去り。又漢口名地と云所に至り。密に一室  
 を求め。處を乞ふ。中秋月朗。遊人雜沓。時小至。飛瓊救ひて  
 欄干小凭。月に向ひて一聲喉轉。其声九陌。響傳。觀者雲の如く  
 擲響せざる者。明晨より巨商貴客盡く。車馬門前。喧け。俄に  
 声價大に高く成。僅に三月の間。所の纏頭を以て。都閩が欽額を借  
 け。都閩免れ。獄と出。都閩大に喜び。速に人を遣。飛瓊を迎。け  
 せ。飛瓊乃至。都閩向て云。妾を本烟花の賤質。主私昵。弱

く。動もまじか。困の課を虧く。縲紲又陥るるを致し玉か故。又右を蒙恥を忍び復声と色と衣以て。人ぬ媚事へ其纏頭を以て。主の幽繫を免せしめ奉る。とのへま。既ぬ一ひ際しる身復機獨又陥ぬ尚何の面目有と。偷生く主君の辱を重ねんやと云ひく。遂ぬ自經しと死けりま。

義虎傳

嘉靖年中。山西孝義縣の樵夫早朝。高唐山ある叢菅中。穴の形釜を覆たるが如く。四面切立ちたるやうな内三面を。さるど死岩角ひと。て。ちもびりれず。前の一面を稍一平し。高さ一丈をりあり。且藪澤のちが落し一筋あり。是虎の穴も虎選るる也。樵夫躑躅しんとく覺り

落る。度幾度と云数を知らず。遂に上るる。我は傍徨と立遠りく。泣くを待り外あり。日落風生を虎嘯と壁を踰り穴に入る。我視ま。大虎一ツ口生を麋を銜へ。其肉を分く小虎共又飼ふ。樵者が蹲伏するをん。爪を張く既奮搏んとく。俄に巡視とある者。の如く。反く残肉を樵夫と與へ食しぬ。小虎を抱く臥り。樵私に度。今宵は虎食飽る。るん。明朝は我を食らんと多ひ居る。味爽方又成と虎躍り。停午頃ぬ又鹿一を銜へ来と小虎又飼さく其餒を例の樵に投與ふ。此時樵餒る事甚しかりけま。其肉を取と啖ひ。渴く時。自其弱を飲み。此の如くする。る。彌月餘也。浸る虎と押ぬ。小虎漸々壯成しけま。或日大虎負と外へ出。故樵意ありて天を仰ぎ。大王我を救ひ。呼りけま。須臾ありて

虎復穴に入。雙足を拳首を俛く。樵が側より来り。樵虎を騎せ  
 けし。膝上を樵を穴の外に置き。虎を子を携ゆ。陰崖下のく。木立  
 生えたり。鳥の声。ふきこえど。風獵々として。黒林より吹出る。樵益  
 急く。大王と呼。虎乃卻頭を推張と告ぐ。曰。大王我ををまひぬ。り  
 今茲ぬく見とく。玉を。他の患免きざらん。我懼る。大王我を活玉を。  
 我を中衢あぐ。導王。我死とこそ。大恩を報車を忘す。と哀乞け。は  
 虎領く。遂に前と中衢に至す。反り立と。樵を視る。樵復臨く。曰。小人を  
 西関の窮民なり。今別と奉りて。家は帰るを。必豚一ツをのちと。西関より  
 三里外なる。郵亭の下より待奉る。某日某時大王出来す。きき  
 め。五口言を忘れ。玉の勿と云け。は。虎點頭す。樵者泣け。は。虎も

又海を隨く。別と。樵夫家へ歸る。追ひ。家人驚愕。と。訊く。は  
 樵夫其故を語。は。は。喜あり。期日。至す。は。豚を見。と。宰  
 割する程。虎期。先。至る。樵を見。故。竟。西関の中。入。居民共  
 虎を。驚。獵者。呼。先関の柵を閉。各。斧銃。弩の類を  
 持。競。集。生擒。巨。宰。献。んと。約。斃。斯。處。樵夫奔来。衆  
 へ。向。曰。虎我。大恩。有。願。公等。傷。ひ。ぬ。勿。且。言。を。衆  
 へ。聽。を。竟。は。虎。を。生擒。巨。宰。献。は。樵夫。鼓。を。打。大。呼。り  
 け。召。入。と。向。は。多。く。の。代。具。を。告。官。其。誤。を。ん。疑。ひ。く。  
 大。怒。を。詰。訊。け。は。樵夫。請。驗。王。若。稟。を。所。証。を。願。は。石。花  
 受。と。請。是。因。官。親。虎。の。所。至。樵夫。前。と。虎。を。抱。く。痛。く







